

省農薬栽培米に対する生産者の評価

横田悦子・河野あけね・井上眞弘*

(宮城県農業センター・*宮城県農産園芸課)

Evaluation of Rice Farmers to Low-impact Agricultural Chemical Cultivation

Etsuko YOKOTA, Akene KOUNO and Masahiro INOUE

Miyagi Prefectural Agricultural Research Center

* Agricultural Product and Horticulture

Division, Miyagi Prefectural Government Office

1 はじめに

農薬の使用回数を減らすことができ環境にやさしい米としてササニシキ BL が、栽培されるようになって数年が経過している。栽培者のササニシキ BL 導入時の期待と栽培後の評価、また導入していない農家の理由を明らかにし、生産者の視点から省農薬栽培可能な水稻品種の評価をする。

2 調査対象及び方法

宮城県角田市産直米生産者（以下「産直米生産者」と略記）は生協と産直契約を結び、有機省農薬提携米として販売している。今回の調査では、平成7年度に行ったアンケートでササニシキ BL の導入に積極的であった産直米生産者80名と、計画外流通米栽培者17名を対象にした。

また実際にササニシキ BL を栽培した生産者も対象とし、平成7年度及び8年度に県へ登録したササニシキ BL 作付団地の代表者を100名無作為抽出した（ササニシキ BL を栽培する場合には3 ha 以上の団地を作り、県へ毎年登録する必要がある）。

上記197名へ調査用紙を送り、記入後返送してもらった（平成10年7～8月実施）。計画外流通米栽培者の回収率・有効回答率は共に94%（16部）であり、産直米生産者の回収率は77.5%（62部）、有効回答率は75%（60部）である。ササニシキ BL 栽培登録者（以下「栽培登録者」と略記）の回収率は82%（82部）、有効回答率は80%（80部）である。以上合計156名の回答を分析した。

3 調査結果及び考察

(1) ササニシキ BL 導入者の評価

ササニシキ BL を導入したのは栽培登録者が80名、計画外流通米生産者が8名、産直米生産者が12名であった。

ササニシキ BL に対する生産者側の評価において、実際に栽培した回答者の75%以上がいもち病の発生が抑制されたと答えている。このことから、ササニシキ BL 導入前の期待として最も高かった「いもち病の軽減」に対して十分な効果があったといえる（図1）。この他の栽培特性をササニシキと比較すると収量については3者とも「同程度」との意見が多かったが、薬剤の使用回数に関して産直米生

産者の約60%がササニシキと変わらないと答えたのが特徴的であった（他2グループの70%以上は使用回数が減ったと答えている）。これは生協の産直米が農薬使用を通常の半分以上に抑えたとされており、産直米生産者がササニシキでも既にその技術を確立しているためと考えられる。

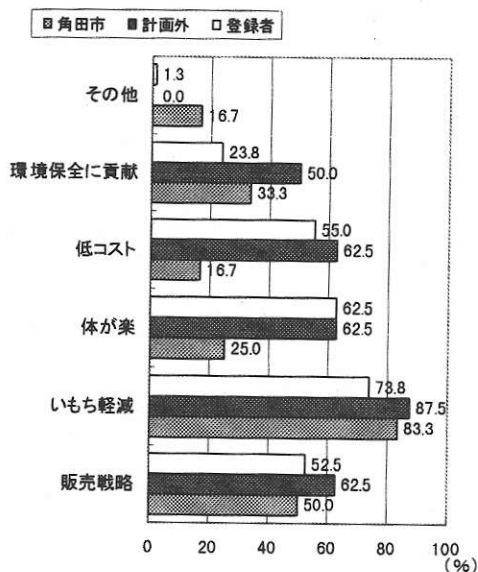


図1 ササニシキ BL への期待

注. 1) 導入した回答者のうちの項目に対する複数回答

ただし3者とも2割以上の回答者が、ササニシキ BL に比べて「ササニシキの方がおいしい」と感じ、同じく約2割の回答者がササニシキ BL が持つ真性抵抗性の性質を「あまりよく知らなかった」と答えた。ササニシキ BL はいもち病抵抗性以外はササニシキと同じ形質を有する品種なので、これは栽培管理面及び品種特性の認知を徹底する必要があると考えられる。

生産費については、「収量が変わらず薬剤費の使用が減った」との回答が多かった栽培登録者と計画外流通米生産者のグループで、約7割以上が「減った」と答えたが、「薬剤の使用量が変わらない」と答えた産直米生産者では、生産費の増減について約5割が「どちらともいえない」と回答した（図2）。

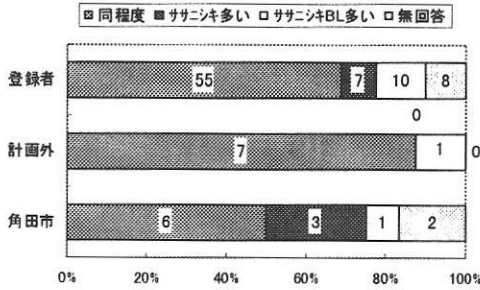


図2 ササニシキ BL の生産費

今後のササニシキ BL の栽培意向は、産直米生産者の7割以上と、他の2グループのそれぞれ5割が栽培に消極的であり、今後ササニシキ BL の栽培面積は減少に向かうことが予想される。この理由の1つにはササニシキ自体の人気の相対的な低下があり、そのことがササニシキ BL の栽培意向にも反映されるとみられるからであろう。

(2)ササニシキ BL 未導入の理由とササニシキ BL の評価
平成7年度のアナケートでササニシキ BL の導入を希望したが、その後導入しなかった産直米生産者(48名)と計画外流通米生産者(8名)が、その理由として両者とも一番に挙げたのは栽培面積の制限であった。ササニシキ BL はその品種の特性から1カ所の面積を3ha以上にして作付けすることを義務づけているが、団地化が困難であったため導入できなかったという回答である。その他は、農協の指導によりこの品種が導入できなかったこと(農協の販売戦略上でのことと考えられる)や、農協への全量出荷が前提であるため販売が不自由であること、栽培登録など手続きが煩雑なことがそれぞれ回答の10%を占めた(図3)。

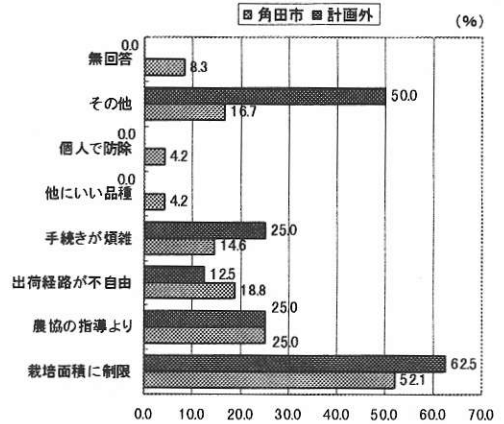


図3 ササニシキ BL を導入しなかった理由

4 まとめ

ササニシキ BL 導入者は、いもち病抑制効果とササニシキと同様の品種特性については満足しているが、栽培面積は減少傾向にある。その大きな理由の1つに、省農業米は消費者の関心は高いものの、ササニシキ自体の人気低下があり、従ってササニシキ BL の栽培にも消極的にならざるをえない実状がある。

しかし、今後は環境への負荷軽減が一層期待されることからササニシキ BL の意義は大きい。現在のササニシキの栽培をササニシキ BL に切り替えるような誘導(栽培管理技術の徹底による食味の安定や、強力な販売促進活動、栽培団地化の促進)が必要である。